

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.28

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1 みなとびあファンクラブの歩み P.2~3

特集2 企画展 報じられなかった写真
昭和30年代——写真家・小林新一の820カット P.4

常設展示室から 肥前焼の骨壺 P.5

おすすめの一冊 新旧地形図で見る新潟県の百年
明治~平成の変貌 P.5

みなとびあ 研究notes 「牡丹山」と注記された増輪片 P.6

館長日記 貸間の広さ P.7

収蔵資料紹介 蟹の轆 P.7

博物館を支えるモノ・もの 虫ピン P.8



常設展示の展示替えの様子

新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.28

【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・参加費・対象
5月3日(金) 14:00~15:30	こいのぼりづくり	傘袋をつかって、かわいいいのぼりをつくりましょう。風車もついています。	不要・50円 材料がなくなり次第終了
5月5日(日) 14:00~15:00	愛のかぶとづくり	大きな紙を使って、直江兼続の「愛のかぶと」を折ってみましょう。かぶることもできますよ。	不要・無料 材料がなくなり次第終了
5月6日(月) 14:00~15:00	伝承折り紙	花や虫など、昔から親しまれてきた形を折って遊びます。	不要・無料
5月12日(日) 10:00~12:00	親子で自然体験	春のみなとびあ敷地をたんけんしながら自然にふれあい楽しくあそびます。	5/10必着・無料 未就学児とその保護者20組
5月25日(土) 14:00~15:30	みなとびあめん部糸を紡ぐ	わたから糸をとり布を織る。この一連の手作業を博物館資料を使って、参加者とともに復元する試みです。	お問い合わせください
6月1日(土)・2日(日) 14:00~15:30	ピンホールカメラ	1日目は針穴カメラを自分でつくります。2日目は自分が作ったカメラを持って、みなとびあ敷地内を撮影、現像します。	5/28必着・200円 小学生以上10名
6月9日(日) 14:00~15:00	【むかしのあそび】あやとり・たけなご・けん玉	あやとり、たけなご、けん玉、コマなどむかしながらの遊びにチャレンジ!	不要・無料
6月15日(土)・16日(日) 14:00~15:30	トンボ玉づくり	ガスバーナーでガラス棒を溶かして、トンボ玉とよばれるガラスピースをつくります。	6/11必着・100円 小学生以上10名(各日)
6月29日(土)・30日(日) 14:00~15:30	布をおってみよう	空き箱を使って織り器をつくり、裂き織りのコースターを作ります。	不要・無料 材料がなくなり次第終了
7月6日(土)・7日(日) 14:00~15:30	ワラ紙づくり・七夕飾り	ワラから紙をつくり、七夕の短冊にして、願い事を書き入れます。他にもいろんな七夕飾りをつくって、七夕の笹飾りをしましょう。	不要・無料 材料がなくなり次第終了
7月14日(日) 14:00~15:00	【むかしのあそび】紙ヒコーキ・紙トンボ	良く飛ぶ紙ヒコーキや紙トンボをつくって、外で飛ばそう! さらに良く飛ぶ工夫をして飛ばすとうなるかな?	不要・無料 材料がなくなり次第終了

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中企画展

「報じられなかった写真 昭和30年代——写真家・小林新一の820カット」

昨年他界した小林新一(1917-2012)は、立て続けに災害を経験した昭和30年代の新潟の姿を日本にむけて発信しました。彼の未公開ネガフィルムを検証し、グラフィカ記事として「使われなかった」カットを紹介します。

【会期】2013年4月27日(土)~6月9日(日)

【休館日】5/13(月)・20(月)・27(月) 6/3(月)

観覧料	一般	500円(400円)
高校生・大学生	300円(240円)	
小学生・中学生	200円(160円)	

()は団体料金(20人以上)
※小・中学生は土日祝日無料
※企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます

展示解説会	レクチャー①	レクチャー②
日時: 毎週土曜日 午後2時から 会場: 1階企画展示室 事前申し込み不要 (当日の観覧券が必要) ゲスト 6月8日(土) 元テレビディレクター: 大澤建一さん	写真に学び写真を楽しむ (新潟県写真家協会共催事業) 日時: 6月2日(日) 午後1時30分~3時 講師: 内山 晟(新潟県写真家協会副会長) 会場: 2階セミナー室 事前申し込み・参加費は不要 定員: 先着80名	デジタル一眼レフカメラで作品作りを楽しもう!! (株式会社新潟フジカラー共催事業) 日時: 6月9日(日) 午後1時30分~3時 講師: 椋沢善孝(写真家・フォトアドバイザー) 会場: 2階セミナー室 事前申し込み・参加費は不要 定員: 先着80名 カメラ等の持参は不要

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日に
お話しします。

時間: 13:30~15:00 会場: 本館2階セミナー室
申込み: 不要。当日受付、定員50人程度
資料代: 100円(資料のない回は無料)

第1回目の博物館講座は、5月26日(日)に開催いたします。

次回企画展 「新潟の漆器」

新潟における漆器の歴史と生産の両面から紹介し、
生活の道具としての漆器の歴史と文化について考えます。

【会期】2013年7月20日(土)~9月1日(日)

【休館日】7/22(月)・29(月) 8/5(月)・19(月)・26(月) ※8/12(月)は開館

観覧料	一般	600円(480円)
高校生・大学生	400円(320円)	
小学生・中学生	200円(160円)	

()は団体料金
※小・中学生は土日祝日無料
※企画展示観覧券で常設展示も御覧いただけます

みなとびあからのお知らせ みなとびあは燻蒸期間のため、6月17日(月)~24日(月)まで休館します

博物館を支えるモノ・もの 虫ピン

壁に掲示物を留めるのに、普通はダルマピンや画びょうを使っています。虫ピンは細すぎる上に、ハンマーで打ち込む必要があって不便です。しかし、博物館の展示には、虫ピンは欠かせません。ピン打ちは、博物館学芸員の基本技能といっても過言ではありません。虫の標本を留める...という本来の使い方ではなく、壁に展示パネルをピン留めしたり、テグスを床に固定するのに使ったり、白布を縫い止めたりと大活躍です。うっかり床に落とすと容易に見つからないほど小さくて目立たない虫ピンは、それゆえに展示を支える裏方の筆頭格なのです。

編集後記

「帆樫成林」第28号はいかがでしたか。今号の特集ではみなとびあファンクラブの活動について紹介いたしました。様々な活動を通して、より多くのみなさまにみなとびあファンとなって頂ければと思います。さて、さわやかな季節となり出かけやすくなって参りました。当館では企画展はもちろんのこと、博物館講座やたいけんプログラムなども行われます。ぜひ足を運んでください。皆さまのご来館をお待ちしております。(早川)

■お問い合わせ・申込みは博物館まで・・・
新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
TEL: 025-225-6111 fax: 025-225-6130
E-MAIL: museum@nchm.jp
休館日: 毎週月曜日、祝日の翌日 開館時間: 9:30~18:00



帆樫成林「はんしょうせいりん」第28号
編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷/株式会社博進堂

みなとびあファンクラブの歩み

企画普及課
渡辺 絵奈

みなとびあファンクラブについて

新潟市歴史博物館みなとびあが開館した平成十六年三月から三年半後、開館四年目の平成十九年十月一日にみなとびあファンクラブは始動しました。設置に当たっては他の博物館の友の会等にアンケートを取りながら、当館ではどのような形が望ましいのかを考えました。ファンクラブの目的には以下を挙げました。

- 一、情報を提供し、リピーターを増やす。
- 二、ボランティアとは違った形でみなとびあを応援してくださる方を組織化する。

他の館のように「観覧料無料」のような特典はありませんが、年会費六〇〇円という比較的安い会費で、みなとびあファンを増やしていきたいということになりました。また、十月更新、四月以降の入会承諾のシステムを採用しました。

- 常設展・企画展観覧料二割引
- 博物館ニュースやチラシ等、館の情報を定期的に送付
- 企画展解説会やまちあるき等、会員向け行事の開催

●館長バスツアー

平成二十年五月には館長バスツアーを開催しました。それ以前にも館長バスツアーを行っていましたが、この年からファンクラブ会員限定として形を変えての開催となりました。館長バスツアーは例年五〜六月頃に行っており、ファンクラブの行事の中でも人気のイベントです。現在までに五回開催しました。一回目のバスツアーは甘粕館長(当時)と南魚沼を訪ねました。この翌年に放映された大河ドラマ「天地人」の放送がちょうど決まったときでした。



H24 バスツアー-青海神社



H21 バスツアー-古津八幡山

(本誌、年三回)等を送付しています。会員向け行事は、まちあるき、館長バスツアー、講演会、企画展示解説会を行っています。

●会員向け行事

●まちあるき

みなとびあファンクラブの記念すべき一回目の行事は、始動から半年ほど後の平成二十年三月に開催したまちあるきです。「新潟まちあるき」どこにでも歴史はある」というタイトルのもと、新潟市中央区の関屋地区を歩きました。以降、春と秋に伊東副館長の案内で巡っています。

- ◆第一回 平成二十年春 「関屋まちあるき」 菅原神社・戊辰公園・金鉢山など
- ◆第二回 平成二十年秋 「新川を歩くⅠ」 内野大神宮・西川水路橋・新川右岸排水機場など
- ◆第三回 平成二十一年春 「大畑かいわい」 カトリック教会・砂丘館・あさひまち展示館など
- ◆第四回 平成二十一年秋 女池(悪天候のため中止)
- ◆第五回 平成二十二年春 「八十年前の地図を片手に女池の村道を歩く」 男池跡・女池神明宮・逆タケなど
- ◆第六回 平成二十二年秋 「島から砂

●甘粕館長と行くバスツアー

- ◆平成二十年 「直江兼続ゆかりの地―南魚沼の史跡を訪ねる」 坂戸城・雲洞庵・飯綱山古墳群など
- ◆平成二十一年 「小須戸の町並み散策と古津八幡山遺跡見学」 小須戸町並・県埋蔵文化財センター・古津八幡山遺跡など
- 小林館長と行くバスツアー
- ◆平成二十二年 「新潟市近郊と五頭山麓古代・中世の旅」(笹神・出湯方面)
- ◆平成二十三年 「寺泊・和島方面 越後古代史研究の軌跡をたどる旅」(白山媛神社・歴史民俗資料館(長岡市和島)・隆泉寺など)
- ◆平成二十四年 「古代蒲原郡の遺称地を巡る」(新津・加茂・三条方面) 古津八幡山弥生の丘展示館・青海神社・藤ノ木権現など

館長バスツアーでは館長と担当芸芸員が、行先から見学地や昼食会場、どのようなルートで回るかなど全ての行程を考えます。前もって現地の下見をし、当日に備えています。そのおかげで当日は効率よく見学ができ、充実したバスツアーとなっています。

●講演会

ファンクラブ二年目にはファンクラブ会員限定講演会を始めました。講演会は例年二月という寒い時期の開催ですが、毎回たくさんの会員の方に参加いた



H22 秋下町まちあるき

- ◆丘に登る―広がるシモ― 湊稲荷神社・栄小学校・日和山共同墓地など
- ◆第七回 平成二十三年春 「梨島―信濃川と他門川に囲まれた島」 木揚場教会・鏡橋碑・大円寺公園など
- ◆第八回 平成二十三年秋 「流作場をめぐるⅠ(南半分)―古い地図を見ながら歩いて昔の情景を偲ぶ」 弁天公園・下所島ポンプ場・水島稲荷など
- ◆第九回 平成二十四年春 「流作場をめぐるⅡ(北半分)―古い地図を見ながら歩いて昔の情景を偲ぶ」 旧笹口踏切跡・古信濃川排水機場・八木家別邸跡など
- ◆第十回 平成二十四年秋 「山の下―港と工場の町の面影」 日東硫曹跡地・大山台・臨港大踏切跡など

まちあるきでは、普段は見過ごしてし



H25 館長講演会

だいています。現在までの開催五回は館長が講演しています。

- ◆平成二十一年 甘粕館長 「古墳に学ぶ―私の考古学人生―」
- ◆平成二十二年 甘粕館長 「ヤマト政権が開く古墳の道―北陸・越後から東北まで―」
- ◆平成二十三年 小林館長 「淳足柵を探して」
- ◆平成二十四年 小林館長 「新潟古代史断章―高志国から越後国―」
- ◆平成二十五年 小林館長 「淳足柵探求の新たな展開」

甘粕前館長も小林現館長も、長年の研究に基づく内容の話でした。大変興味深く、参加者も熱心に耳を傾けていました。

みなとびあファンクラブのこれから

現在ファンクラブは六年目に突入しました。これまでの会員数は以下の通りです。

- ・一年目 一九四名
- ・二年目 一六七名
- ・三年目 一七五名
- ・四年目 一四八名
- ・五年目 一五五名
- ・六年目 一四二名(平成二十五年三月現在)

更新と新規申込みとを併せ、毎回一五〇名前後の方に会員となつていただいています。大幅に減ることも無く年を重ねられ、会員の皆様には大変感謝しております。一年分の会費がそう高くない価格であること、イベントも無料、もしくは実費程度での開催ということが継続・入会いただける要素でもあるかとも思っています。

しかしながら、更新時に継続手続きが無く退会される方も毎回二〇〜三〇名程いらつしゃいます。現在行っているまちあるき・バスツアー・講演会・展示解説会は概ね好評を得ているかと思っておりますが、さらに魅力的な内容で続けていくことが必要となります。毎回継続してもらえらるような、そして、新しい方にも興味を持っていただけるような情報発信も心掛けていきたいと思ひます。

来年の三月でみなとびあも十周年となります。より地域に根差した博物館となるよう頑張っていきたいと思ひます。今回、みなとびあを応援したい!と思つてくださった方がいらつしゃいましたら、みなとびあファンクラブへどうぞご入会ください。

(わたなべ えな)



H23 くらし展解説会

●展示解説会
第一回まちあるき開催に続いての行事は、企画展「酒蔵」展の解説会でした。ファンクラブ会員向け展示解説会は、企画展開幕日に通常の解説会に先駆けて行っています。むかしのくらし展では通常は解説会を設けていませんが、ファンクラブ会員向けとして特別に開催しています。むかしのくらし展・解説会ではまちあるき同様に、参加者からも色々な思い出話などを聞かせてもらっています。

木村 一貫

撮った写真をその場で確認できるのが「デジカメ」の利点です。「フィルム」が当たり前だった頃はそうはいきませんでした。現像に出し、上がったプリントをみたら何も写っていないなかった、などという笑いえない失敗談も結構ありました。

ロール状のフィルムは、シャッターを切った順に映像を物理的に記録する媒体です。たとえ気に入らないカットがあっても、それは現像してみなければわかりません。削除しようにもハサミで切るしかないのですが、ただ、歴史資料としてみると様々な可能性が眠っているように思います。特に、撮影時間の連続性は重要な要素です。現場でのカメラマンの意図や行動が浮かび上がってくるからです。では、フィルム全体の流れの中にどのような発見があるでしょうか。この展覧会は、写真を一枚の映像としてではなく、連続する「群」として読み解く手がかりを紹介します。

出品する写真は、すべて新潟の写真家、小林新一によるものです。小林は報道写真の分野で活躍した社会派のフォト・ジャーナリストでした。特に、デビュー時期にあたる昭和三十年代は、新潟で大火(昭和三十)や地盤沈下(昭和三十年前半)、大地震(昭和三十九)といった災害が立て

続けに起きた時代でした。小林は、そうした新潟の姿を『アサヒグラフ』『中央公論』『文藝春秋』などで報じてきたのです。

報道カメラマンは、スタジオ撮影とは違う動きをします。予期し得ない出来事に軸足を置いていくからです。それゆえフィルムには、撮影者だけが知る現場の事情が刻印されていることがあります。

たとえば下の写真(図1)をみてみましょう。昭和三十年一月、西船見町で高潮の被害を受けた住民たちが、危険が迫る家屋を取り壊し、土のうを積んでいる様子が写されています。

この中で小林は、子守りをする少年の写真(図2)を選び、発表したことがありません。海岸を背に「逃げる」姿を、少年に象徴させたのでしょうか。しかし前後のコマを通して見ると、大人たちの深刻さとは対照的に、まだ状況が飲み込めていない子どもたちは、案外無邪気だったようです(図3)。

一枚を選ぶことは、表現の意図を限定することに他なりません。ときにその限定された一枚の前後から現場の意外な側面がみえてくる場合があります。想像力と推理力を働かせて、「選ばれなかったカット」から半世紀前の新潟に思いを馳せてみてください。

(きむら ひとやす 学芸員)



図1



図2(図1の下段左から3枚目)

図3(図1の下段左から2枚目)

常設展示室から

肥前焼の骨壺

江戸時代が考古学の対象という不思議な感じがするかもしれません。考古学の発掘調査対象は長らく古代以前が中心でしたが、1970年代以降になって東京都の江戸城下町関係の遺跡などが発掘され、次第に、より新しい時代に調査対象が広がっていったという経緯があります。

新潟市でも近年、江戸時代の遺跡が相次いで発掘されています。その代表的なものが「近世新潟町跡」です。「近世新潟町跡」は明暦元(1655)年に現在地へ移転した新潟町の遺跡です。現在の町に重なっている遺跡なものにも関わらず意外に遺構が残っており、国道の拡幅やビル建設などに伴い江戸時代の町屋跡などが発掘されています。

昨年12月、常設展示室の展示替えて登場した骨壺は新潟町の寺院跡から出土したものです。この骨壺は火葬された遺骨が入った状態で見つかりました。また専門家によって、この骨壺は肥前焼という

現在の佐賀県唐津市付近で作成された陶磁器で、18世紀ころのものであると考えられています。

肥前焼が遠く九州から運ばれてきたことは興味深いですが、視野を新潟町から広げてみると昭和55(1980)年に発掘された西蒲区の旧巻町角海浜の坊々入墳墓でも肥前焼の骨壺が出土しています。また北陸地方の日本海沿岸の遺跡からは江戸時代の肥前焼が広く出土することがわかっています。肥前焼を購入してきた人がどれくらいの経済力を持っていたか、残念ながら詳しくはわかりません。ただ、各地で出土するだけあって肥前焼が日本海を活発に行き来していたことは確かでしょう。

最後に考古学の成果について強調しておかなければなりません。肥前焼が新潟町へも取引されていたことは発掘事例の積み重ねで初めてわかってきたことでした。江戸時代の研究に、古文書的手法に加えてこうした考古学の成果を取り込んでいくことで新しい知見を得ることができるのです。

田嶋 悠佑(たじま ゆうすけ 学芸員)



骨壺の出土状況



肥前焼の骨壺

おすすめの1冊

新旧地形図で見る新潟県の百年 明治〜平成の変貌

近代日本における本格的な地形図の作成は明治十八年に始まります。当初の計画では縮尺二万分の一での製作でしたが、明治二十三年に縮尺五万分の一に変更されました。大正期には日本全域をほぼ網羅しました。新潟市域は明治四十四年に測量され、翌年に発行されています。

本書は、新潟県下五一の地域を対象に、明治・大正期に測量・発行された五万分の一の地形図と最新の地形図を比較し、地域の特徴や地域の変化が一目で分かるように編集されています。併せて、地域の概要と産業などの特徴を文章で紹介しています。

現新潟市域では、豊栄・亀田郷・新津・白根・新潟など一〇のエリアが取り上げられています。新旧地形図を見比べると、市街地のひろがりや高速道路やバイパスの整備などの大きな変化はもちろんなこと、日々の暮らしの中でふと疑問に思う「集落の中を通る、曲がりくねった道路のなぜ?」や「宅地の広がり方」などを考えるヒントが浮かんでいきます。

新旧二枚の地形図から、一〇〇年の変化の理由を推理してみませんか。

(監野 かおり 学芸員)



鈴木郁夫・赤羽孝之(編)
新潟日報事業社
平成22(2010)年

「牡丹山」と注記された埴輪片

小林 隆幸

二〇一〇年、民俗学者であり郷土史研究者でもある金塚友之丞の関係資料が当館に寄贈されました。驚かされたのは、その中に「牡丹山」と注記された埴輪の破片が含まれていたことです。

考古遺物を採取すると、どこで採取されたものが分かるように、遺跡や地点を遺物に記入します。つまり「牡丹山」とは埴輪の採集地を示しています。金塚資料の中には埴輪以外にも考古資料が含まれており、それらにも新潟市域の地名を記したものが見られることから、「牡丹山」とは新潟市東区の牡丹山を示していると考えられます。

もしこれが事実だとすると、新潟県内で南魚沼市飯綱山古墳群の壺形埴輪に次いで二例目の埴輪の発見となり、埴輪を伴う古墳が牡丹山に存在したことになります。

確認できた埴輪片は五点で、埴輪特有のタガ(突帯)が認められます。おそらく円筒埴輪のものと思われれます。円筒埴輪は土管状(筒状)の形をし、二段以上のタガがめぐり、その間に透かし孔が施されます。破片からはタガの段数は不明なものの、透かし孔の痕跡は認められました。外面にはヨコハケと呼ばれる横向きに刷毛で線を引いたような痕が見られます。また、埴輪を野焼きした時にできる黒斑が無いことから、窰窯を用いて

焼いたと考えられます。こうした特徴から円筒埴輪の編年に用いられる川西編年*の第四期、つまり古墳時代中期にあたる五世紀後半頃の埴輪であると考えられます。

では、これらの埴輪は牡丹山に築かれた古墳に供えられていたものなのでしょうか。これについては結論づけるには至っていません。現状で古墳の存在を確認することは難しく、また、「牡丹山」を誤って記載した可能性や、当地に持ち込まれた土の中に埴輪が混入していた可能性もあるからです。

埴輪の所有者であった金塚友之丞は、昭和三十一年発行の『高志路』に「六字山とその他の土器」と題した記事を寄せています。その中に興味深い文章があったので抜粋します。

「弥生式土器の出土地としては(北蒲原郡、岩船郡内を除く)六字山の外新潟市河渡などが比較的海に近く、稍遠い地点には新潟市女池、西蒲原郡湯東村五ノ上などがあり、特に五ノ上地内のは耕地面下四五尺から出る。新聞紙の報道や人から聞いた話では、黒崎村緒立八幡宮丘地からも出たというのである。新潟市牡丹山の諏訪神社丘からのものは、弥生土器かどうかの判定がまだできていない。」

ここに、牡丹山の諏訪神社から弥生土器と判定できないでいる土器が採取

されていたことがうかがえます。これが「牡丹山」と注記された埴輪片である可能性があり、当時は弥生土器として検討されていたのかもしれない。

また、「諏訪神社丘」との表記も注目されます。現状では周囲の造成によりわずかな高まりが認められる程度で丘と呼べる状況ではありませんが、土器を採取した当時は丘状に盛り上がっていたことを示しています。さらに明治二十八年の土地更正図には円形に区画された神社地が記載されており、丘の高まりと合わせ、古墳の存在を想起させます。

つまり、埴輪を伴う古墳の存在を肯定できないと同時に否定もできない状況です。また、円筒埴輪は新潟県内各地で確認されています。これまで埴輪の空白地であったことが新潟県の特徴でした。

ここで、仮に埴輪を伴う古墳が牡丹山にあったとしても、その年代についてはさらなる検討が必要です。牡丹山を含む蒲原平野では、埴輪片の年代と考えた古墳時代中期の古墳が確認されていないからです。こうした状況を踏まえつつ、同時に埴輪の製作地や導入経路等もあわせて考える必要があります。

このように、これらの埴輪片は多くの問題点を抱えつつも、新潟の古墳研究に課題を投げかけています。短絡的に埴輪と古墳と牡丹山を結びつけることはで

きなくても、新潟の古墳には埴輪は無いというこれまでの固定観念を捨て、あらためて新潟の古墳文化を考えさせる動機付けになっています。

(こばやし たかゆき 学芸員)

*川西幸幸「埴輪埴輪論」『考古学雑誌』六四巻一、一九七八年



埴輪片



裏面に注記された「牡丹山」の文字

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

館長日記

Diary from the Director of a Museum

貸間の広さ

日本史では、今も昔も列島東西の違いがよく問題になります。交流電気の東の五〇ヘルツに対する西の六〇ヘルツとか。今回は、体験的な住まいの東西規格の違いです。今から五〇年ほど前、私は歴史を学びたいと花の季節に浪人生となり、新潟から京都へと旅立ちました。

京都は予備校で貸間先の紹介状をもらい、左京区高野の古い小さな町家を訪ねました。二階の貸間からガラス越しに比叡山が見え、窓を開ければ東山の山並みが広く望めました。

六畳押し入れ付きの部屋代は二五〇〇円。水光熱費三〇〇円で自炊もできます、というのでここに決めました。ちなみに五〇年前の当時、銭湯が一五円、市電は一三円で

この下見の折、故郷の我が家の六畳間と比べて、「ちよつと広く感じるなあ」と言うと、脇にいた大家さんが、「そらなあ、まあ『京間』やから、『関東間』や『江戸間』とちやうさかいなあ」というのでおどろきました。

畳の長辺は六尺としか知りませんでした、ここでは六尺三寸もあつたのです。そういえば日本史の受験勉強で、太閤検地の竿の間が六尺三寸と学び、関係があるのか



画像出典・『徳川幕府県治要略』(『国史大辞典』5)より、検地之図

な、と思ったりしたものでした。

そんな私がその一三年後の一九七四年、四国松山に就職が決まり、借家の下見をした折りに六畳の部屋が広めに見えたので、「この部屋は『京間』ですよ。」と大家さんに確認を求めると、「いえ、『きょうま』じゃないんよ。『本間』ですよ。」というお答えに私は一瞬耳を疑いました。

「じゃあ『きょうま』はどういうのですか」というと、「それは、ほら『関東間』とかいう、ちよつとせまいお部屋のことを言いますんよ」と言われて、「エーそれは漢字だとう書くんですか。」と聞き返してしまいました。「それは、せまい、まー(狭間)」と書きまますんよ。」とのご説明で、ようやく私の誤解の訳が分かり、また地域の「量制史」への関心も芽生えたという次第です。

収蔵資料紹介

蚕の疇

本資料は、嘉永五(一八五二)年五月

に初代新潟奉行・川村修就が記した新潟についての随筆です。反故紙の裏面に書かれた草稿であり、いたるところに抹消や筆を加えた跡があります。残念ながら清書は現存しておりませんが、このような草稿段階の古文書は、清書では抹消されてしまっている情報を含む場合があり、書き手によって行われた情報の取捨選択の過程を伺い知ることが出来ます。このため清書以上に当時のようすを伝えてくれることがあります。

本資料の内容は、新潟の地理や気候にはじまり、町人や町の様子、人々のはなす言葉や、砂よけ・川よけ、新潟の名産、水、病など多岐にわたります。このうちタラ漁、ヤツメウナギ漁やサメ釣り(※1)、漁師の船歌や「矢鱈魚」(※2)という珍しい魚についての記述など、漁業についての事柄が比較的多く記されています。

たとえば、漁師の船歌について、次のようなことが記してあります。
この地の漁師が歌う船歌は、江戸の水主たちが歌うものとは調子がちがひ、少しく催馬樂(※3)などに似てて鄙びている。

川村修就は江戸からやって来た人であるため、こうした江戸との比較がし



写真:「鰯鮫」を記した箇所(一部)

ばしは見られません。

また、サメ釣りについては、おおよそ次のような内容が記されています。
新潟の漁師は、サメを釣ることがある。ただし、サメを得たいがために釣るのではない。「はへ縄」の漁場にやってくるサメに、魚をとられてしまうため、それを阻止するためにおこなうのである。サメ釣りにつかう針も糸も、いかにも丈夫そうにして、餌も多くつけて、大きい麻をあげるような方法で、手には布などを巻く。サメがかかり、強く引くときは、船も引っぱられる程であるのをあしらって、船に引き寄せて、太い綱にかけて帆柱に巻いて船に入れる。何でも物をかみ切るの、薪などを噛ませておく。サメは獲っても捨てるも同然なので、漁師には利益がないことであると云う。江戸近くの海では、こういうことは聞かないことだ。

他の資料からは、あまり知ることができない新潟の漁業の細部を伝える興味深い記述です。
(安宅 俊介 学芸員)

※1 資料には気性のあらいサメを意味する「鰯鮫」という見出しが付けられている。
※2 ヤカラ。赤く細長い、ヨウジウオ目ヤカラ科の海魚。
※3 日本古来の歌謡を唐桑の拍子と旋律に合わせて編曲したもの。